

大学チャペルにおける讚美

チャペルクワイアの活動 — パイプオルガンの導入を巡って

古澤 嘉生

◇プロローグ

西南学院大学が創設されたのは1949（昭和24）年であった。大学開設の最初の年に新生として入学した筆者は、英文学科で4年間、引き続き神学科で2年間の学びを終え、米国留学に旅立った。1958（昭和33）年に帰国、同年10月に大学文学部神学科の専任教員として就職し、2000（平成12）年に定年退職した。入学以来、学生としての期間（米国留学の3年間の空白はあったが）、そして教員としての退職までの期間を合わせると、大学、殊にチャペルの音楽 — 讚美とは、51年間の関わりがあった。退職後も2009（平成21）年までパイプオルガンの奏楽、チャペルクワイアの指導もしていたので、大学チャペルの音楽活動とは都合60年間の関わりがあったことになる。戦争が終結した時は、公立の中学生であったが、教会との関連もあってその時期の学院の状況もすこし見て知っているの、その辺から話を始めることにする。

◇戦争終結 — 大学設立の時期

1945（昭和20）年に戦争が終結し、日本は米国の占領下に置かれ、福岡にも駐留軍がやってきた。米国の軍隊には、チャプレン（従軍牧師）の制度がある。彼らは兵士（GI）の宗教指導にあたるのが本務であったであろう。複数のチャプレンが、早々とキリスト教学校である西南学院を訪問し、当時の学院宗教主任、河野貞幹先生と西南学院バプテスト教会牧師であった尾崎主一先生と会談、双方協議の上、日米合同のキリスト教教会を毎週土曜日の夕、赤レンガの西南学院講堂・礼拝堂（W. M. ヴォーリズ設計、現在の大学博物館）で行う取り決めがなされた。まだ宣教師も来日していない時であった。そこでは毎週盛んに英語の讚美歌が歌われ、説教（英語）、聖句の暗唱等があり、陰鬱な戦時下の空気とは違った明るい、華やかな集会が持たれていたのである。筆者は西南学院で英語の教師をしていた長兄（古澤基生）と姉と三人で毎週この集会に出掛けて、この英語による集会から多くを学んだと思う。当時、旧制中

学4年生（現在の高校1年）だったが、その時英語で The Lord's Prayer（主の祈り）を覚えた。考えてみると、西南学院は、その頃からすでに広く一般市民に門戸を開き、市民との交流を図っていたと思う。戦前にも来日していた W.M. ギャロット博士が 1947（昭和22）年に再来日し、西南学院の教授として着任した。同師が西南学院バプテスト教会で特別集会を指導した際、先生のメッセージを通してキリスト教信仰に導かれ、バプテスマ（洗礼）を受けた。その前から、再来日して西南学院で英語の教授に就任していた宣教師アルマ・グレーヴス先生のバイブルクラスにも出席していたので、これから英語を専門に勉強しよう、そのためには大学開設の準備をすすめている西南学院に是非とも進学したいと心に願っていた。

◇西南学院大学の出発とチャペル

希望通りに1949（昭和24）年に開学された大学の英文科に無事入学ができた。初代の学長は先の W.M. ギャロット博士であった。先生の強烈なリーダーシップの下に、大学は新興の意気に燃えて、未来に向かって発展の夢を抱きながら大学としての第一歩を踏み出していた。開学当時は大学独自の礼拝堂と言うものはなく、チャペルはかつて中学・高校が使用していた、西南学院最古の建物、西南学院本部・講堂で行われていた。何よりも強烈に印象に残っているのは、ギャロット学長自ら毎回壇上から力強いメッセージを語り、先生独特の特徴ある仕草で左手を振りながら讃美歌を指導され、多くの讃美歌を歌っていた。伴奏は図書館司書であった杉本善夫氏が一手にピアノを受け持っておられた。講話は学長をはじめとして、キリスト者の先生方が担当されていた。チャペルでは多くの良い讃美歌を学んだと思う。

大学の建造物に関しては、やがて大学第一号館（旧）（1952年）が建築された。その大学第一号館（旧）の3階303号室という大教室がチャペルとして使用されるようになった。続いて大学ランキン・チャペル（1954年）と、施設の面で充実しはじめ、それに伴って大学全体の研究活動、講義等も落ち着き、充実の方向へと進み始めたという印象を持っている。チャペル活動も、よき礼拝堂、豊かな音色のオルガン（電気）も備えられ、充実したチャペル・アワーが始まったように思う。筆者は学生時代（1952年）から大学よりチャペルのオルガニストに指名されていたので、チャペルの状況はつぶさに観察していた。



ランキン・チャペル完成後のチャペル・アワーで（学生時代の筆者：1955年）

A チャペルクワイアの創設と歩み

学院には昔から伝統ある男声合唱グリークラブがあり、時に応じて男声合唱による力強い讃美の奉仕がなされていた。一方、欧米の歴史ある大学に存在してきた聖歌隊（チャペルにおける讃美と学内の諸行事においてキリスト教音楽を合唱・讃美するチャペルクワイア）の設置が期待されていた。戦前に西南学院で教鞭をとっていた宣教師が、再び米国南部バプテスト連盟外国伝道局から日本に派遣され、西南学院に復帰した方々に加えて、新たに数名の宣教師方がいたが、その中にジョン・シェパード、ジーン・シェパード夫妻があった。夫君ジョン・シェパード先生は、社会学専攻で、商学部（後、経済学部）教授、大学宗教主任（現・宗教部長）等も兼務、夫人ジーン先生は神学部で教会音楽を担当していた。当時学生であった筆者は、シェパード夫人の講義の通訳をはじめ、音楽の諸事について相談にのり、協力していた。1954（昭和29）年のことであった。チャペルクワイアを結成したらどうであろうかとの相談を受けたので、大きな募集要項を書いて大学掲示板に掲示した。10数名の応募者があり、同先生によるオーディションの結果、混声4部の8名でスタートすることになった。西南学院大学チャペルクワイアはこのようにして創設されたのである。指揮は創設者ジーン・シェパード先生、筆者は伴奏の役割が多かったようで、時折バスのパートを歌っていたように記憶する。チャペルクワイアは折々のチャペルでの讃美奉仕、また入学式、卒業式、その他の式典、諸学校行事等で教会合唱音楽を歌い続けていくことになる。しかし、その翌年1955（昭和30）年、シェパード夫妻は一年間の定期休暇（博士論文執筆のため）で帰米することになる。筆者も同じ年に米国留学に出発する。

その後はドロシー・ギャロット講師（担当：英語聖書、ギャロット学長夫人）、ジェラルド・フィルダー教授（経済学部・国際関係論）が指導に当たられたようであるが、やがてそれは中学校教諭で後に校長を務めた志渡澤亨氏に委ねられた。同氏は在学中グリークラブの指揮をつとめ、またチャペルクワイア初期のメンバーでもあったので、クワイアはよき指導者を得て、この時期に合唱グループとしての基盤が固められたようであった。3年間の米国留学を終えて筆者は1958（昭和33）年に帰国し、同年10月から文学部神学科の専任教員になっていた。翌1959（昭和34）年4月からは古賀武夫学長からの指名で、チャペルクワイアの指導にあたることになった。クワイア公演で記憶に残る最初のもは、5月31日の西南学院創立者C. K. ドージャー先生の墓参に参加し、今までは取り上げられたことのないような少し本格的な複旋律様式を含んだ中級程度のアンセム¹を暗譜で合唱、披露したことであった。クワイアは、充分によく準備をして、公演に際しては、必ず暗譜で演奏することを旨とする方針を続けていった。同年のクリスマスには、市民クリスマスが、当時福岡では主要なホールであった電気ホール（渡辺通り）で行われ、チャペルクワイアが単独で演奏した。その時は西南学院（グリークラブ+チャペルクワイア）と小倉の西南女学院（女声合唱）との合同の大合唱でベートーヴェンの「オリーヴ山上のキリスト」の中の「ハレルヤ」等も歌った。その時は河野貞幹院長のメッセージ、初代学長 W. M. ギャロット博士による英語通訳という豪華版であり、盛大なクリスマスで深く印象に残っている。

◇チャペルクワイアの教会（学校、病院、社会施設）訪問春季演奏旅行

このようにして活発な活動を始めたが、1960（昭和35）年春から各地の教会を訪問する演奏旅行を始めた。これを提案したのは指導者になって1年経過していた筆者であったが、大学宗教部は、この企画に賛同した当時事務局の林利久氏が各地の教会に連絡し、クワイアの最初の良き演奏旅行のお膳立てをしてくれた。

チャペルクワイアの教会訪問春季演奏旅行は、初年度1960（昭和35）年は「聖歌合唱による音楽礼拝」と銘打って九州地区の8バプテスト教会を訪問した。最初の演奏旅行であるので、日程を記しておきたい。春休み期間中で第1日はシオン山教会（北九州市小倉北区/秋月敏次牧師）、下関教会（野口直樹牧師）、第2日、大分教会（北原末男牧師）、第3日、宮崎教会（福島勇牧師）、第4日、鹿儿島教会（真鼻敏夫牧師）、第5日、熊本教会（日高範嘉牧師）、第6日、長崎教会（松藤守男牧師）、そこ

1 従来の「モテット」（ミサ曲は別）はラテン語の合唱曲。「アンセム」は主に「イングランド教会」（国教会）で歌われるようになった英語歌詞の教会合唱曲。

で福岡に帰り、西南学院大学卒業式、翌日主日礼拝は西南学院教会（木村文太郎牧師）、28日（月）、大学卒業式と実に一週間にも亘っていた。



1961（昭和36）年3月の大学卒業式（当時、教員は全員壇上に上がった）

これは西南学院大学がチャペルクワイアを通して諸教会に向けて行った初めての大きな奉仕の企画であったので、大学から日本バプテスト連盟に報告され、クワイアの演奏旅行の記事が連盟の機関紙『バプテスト』誌に掲載された。そこには引率者であった大学宗教主任ジョン・シェパード教授が、演奏旅行の意義・目的を次のように述べていた。

「今回の九州演奏伝道旅行の目的は三つあった。第一は、言うまでもなく、教会と共に主のみ名を讃美すること、第二は、各地に西南学院を紹介し、連盟の教育機関としての意義が理解され、各教会の祈りの中に加えられることを願い、第三には、学院と教会の正しい関係、切り離すことのできない関係を互いに理解すること、以上のような目的で計画され、実行に移されたものであった。このような機会を通して、学院の学生が、少しでも教会の奉仕に加わり、共に讃美する喜びを持ち得たことは大変感謝なことであった。」

実際に、受け入れてくださった各教会は、祈りをもって準備し、期待して待ってくださり、本当に温かく迎え、チャペルクワイアの讃美合唱を喜んでくれた。当時は、現在のように簡単に宿泊できるビジネスホテルなどはなく、無論、当方にも経済力はなく、みな教会員の家庭に分宿、あるいは教会堂、宣教師館等に宿泊した。日々の合唱讃美の練習と演奏に加えて分宿の各家庭において、移動の列車内において、すべての機会を通しての人間的なつながりと友愛とは、クワイアの学生諸兄姉の間に自然に育まれたであろうし、それが合唱グループの成長に非常に役立ったと思っている。

翌年、1961（昭和36）年の2回目の演奏旅行は、同様の趣旨の下に四国・中国地方、そして京都まで足を伸ばした。第3回の1962（昭和37）年には、京都から滋賀県、愛知県（名古屋）を訪問。この年は、建築家 W. M. ヴォーリズが設立した近江八幡の近江兄弟社を訪問し、同社のメンソレータム工場、サナトリウム、それに日本基督教団近江八幡教会で演奏を行った。教会で演奏中、突然停電したが、幸いすべて暗譜で歌っていたので、無事に最後まで歌い終えた経験は忘れることができない。1963（昭和38）年（第4回）には横浜、川崎、逗子、京都を回ったが、横浜ではあの氷川丸に宿泊したことは、楽しい思い出となっている。翌1964（昭和39）年（第5回）は再び、九州を南回りに巡回した。

このようなチャペルクワイアの活動が、津川主一著『教会音楽5000年史』（ヨルダン社、1964年）の中で少し紹介されたことがある。津川主一氏は著名な教会音楽家であり、当時、日本の合唱界の大御所的な存在で、日本合唱連盟の理事長であった。その著書の第Ⅸ「日本の教会音楽」の中で、オルガン界で教会音楽に貢献してきた木岡英三郎、奥田耕天に続いて、なぜか古澤嘉生を紹介し、光栄なことに、次のように書かれていた（370-371頁）。「東京方面には、一般にその教会音楽活動が知られていないが、九州の一角で静かに立派な教会音楽の活動を行っている人がある。西南学院大学の古澤嘉生氏とその聖歌隊チャペルクワイアである。…同氏は…20数名のメンバーからなる大学チャペルクワイアを指導し、しばしば各地で音楽礼拝を行っている。1961（昭和36）年の春などには、そのクワイアを率いて四国から山陽、京阪神の各地の諸教会で音楽礼拝を行っている。」

1960（昭和35）年に始まり5年続いた春の教会訪問（次第に、教会のほか、地方の学校、病院、各種の福祉施設等も含むようになるが）では、延べ37箇所で合唱讃美の演奏をしたことになる。1965（昭和40）、66年（昭和41）は、指揮者の英国留学の準備、英国滞在のため演奏旅行は行われなかった。その間は学生指揮者の指導の下に、大学内外で活動を続けていたとの報告は受けていた。

1967（昭和42）年に再開したこの西南学院大学チャペルクワイア演奏旅行は、上記の理念を持って、2009（平成21）年まで続けた。

◇チャペルクワイアの公開演奏会 — アドヴェント・コンサートについて

すでに演奏旅行で公開演奏は行ってきたわけであるが、演奏会と銘打って行ったものは1964（昭和39）年12月12日（土）明治生命ホール（福岡市博多区）で開催した「宗教音楽演奏会」であった。最初のものであるので少し紹介しておく。プログラム

は、賛助出演の1ステージ【バッハ作曲カンタータより ヴァイオリン・オブリガート付き アリア 原田慶子（アルト独唱）、天野晴司（ヴァイオリン）、原田吉雄（ピアノ）】のほか、チャペルクワイアが4ステージ（Palestrina, Tu es Petrus (a 6) ; Schütz, Ehre sei dir Christe ; Bach, Motette “Jesu meine Freude”）をはじめ、全部で20曲の合唱曲を演奏した。合唱の技術そのものは未熟であったであろう。かなり困難な曲もみなで取り組み、切磋琢磨して全部原語も暗譜で歌い通した。参加メンバーは30人（ソプラノ：9名、アルト：8名、テナー：5名、バス：8名）であった。

この後は、毎年クリスマス・シーズンにはコンサートを開くことになっていった。12月上旬に、会場は藤崎にあるホール等で行ったりもしたが、後は、学内で西南学院最古の建造物である現在の大学博物館（当時は西南学院高校講堂＝チャペル）を使用することが何年か続いた。クワイアとして演奏会を行う場所としては会場の規模がより適切であることと、何よりも、環境、雰囲気がチャペルと呼ばれる所なので、クワイアには相応しい場所であった。コンサートの名称は、初めはクリスマス・コンサートであったが、やがて、キャロル・サービス、キャロル・コンサート等であったりもした。ところで、キリスト教の教会暦は降誕節の前に主の降誕を待つ待降節で始まる。クリスマスと言いながら、チャペルクワイアのこの時期の演奏会は、毎年、待降節（アドヴェント）であったので、よりキリスト教的にアドヴェント・コンサートと名称を定め、会場も前記の大学博物館（現在の呼称）から大学チャペル（ランキン・チャペル）で行うようになった。大学チャペルは、クワイアのコンサートの会場としては少し広すぎたかも知れないが、クワイアはよく準備をして精一杯讚美の声を響かせた。プログラムは、時代によって異なることもあったが、大体においてオルガン前奏に始まり、続いて礼拝的な様式風に会衆一同で讚美歌を歌うようにしていた。プログラムの全体は大体4部からなり、第1部ではミサ曲、モテット、アンセム等標準的な教会音楽を歌った。第2部では客演演奏を願うことが多かった。年によって、ギター、クラリネット、フルート、リコーダーなどのソロ、室内アンサンブル、リコーダー・アンサンブル、わらべ歌、日本の民謡を歌う女声合唱なども依頼した。とりわけ長く続いたのはヴァイオリン演奏、これは九州交響楽団のコンサート・マスターを務め、後に大分県立芸術文化大学の教授となった松村英夫氏のヴァイオリンで、ピアノ後ではランキン・チャペルのパイプオルガン（演奏・古澤啓子）との二重奏であった。これは当時毎年好評を博し、チャペルクワイアの誇りでもあった。キリスト者である松村氏はヴァイオリニストであるが、オルガンも弾き、教会音楽に造詣が深い方だったので、筆者が英国で研究のため、不在の年などアドヴェント・コンサートでチャペルクワイアの指揮も務めていただいた。プログラムの第3部は、再び、チャペルクワイアの合唱で、第1部よりは自由な、分り易い合唱曲、時にはスピリチュア

ルなども加えた。最後の第4部は、毎年アドヴェント・クリスマスの合唱曲のステージとし、ここでは、まずチャペルクワイアが会場の正面入り口からローソクを片手に持ち、会衆と共に讃美歌を歌いながら行進して入場してくるのである。クワイアは、全員ステージ上に揃ったところで、楽しいクリスマスの少し高度に編曲されたキャロルなどを歌い、終わりは、たとえばバッハのマグニフィカート（「マリアの讃歌」の終曲）のような良き合唱曲で締めくくることが多かった。コンサートの終わりは、いつも米国のピター・ルトウキン作曲になる「主よ、祝し守り The Lord bless you and keep you」を英語で、祝祷聖歌として必ず歌ってきた。この曲は、アドヴェント・コンサートだけでなく、礼拝、式典、その他公式に演奏した後は、チャペルクワイアの常用曲として高らかに讃美することを習慣としていた。



アドヴェント・コンサートを終わって〈2005（平成17）年12月〉

以上、チャペルクワイアの創設から、その長い歩みについて概略を述べてきたが、クワイアの主体は、これに参加した学生諸兄弟姉によるものである。いろいろなケースで入部しクワイアを卒業した諸兄弟姉は、西南学院大学でチャペルクワイアに導かれ、クワイアを通して有意義な楽しい学生生活を送った、とその喜びを語る卒業生は多い。指導者の立場からも、実に善良な学生たちに恵まれ、親しく交流を深めることができたことは誠に幸いで、感謝すべきことであった。日常の練習、チャペル・アワー、諸式典、コンサート、演奏旅行など、共に励み、切磋琢磨した友らは本当にみな同胞（はらから）であり、音楽的にもクワイアを通して指揮者の方が多くのことを学ぶことが出来たことを心から有難く思っている。1959（昭和34）年から2009（平成21）年までの50年間にも亘って指揮者としての機会を与えられたことを感謝している。

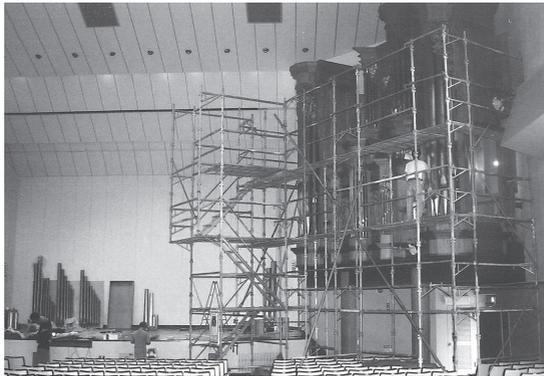
B パイプオルガンの導入を巡って

モーツァルトは、「私の目と耳の中でオルガンはまさに楽器の王である」と言い、フランスの小説家バルザックは「オルガンは真実もっとも雄大であり、大胆であり、人間の英知が考案したすべての楽器の中でも、もっとも崇高な楽器である」と書いている。中世後期以降、オルガンは修道院や教会のミサ・礼拝の楽器として用いられてきた。パイプオルガンは、人が歌を歌う場合、肺で呼吸し、気管を通して口から発声するように（あるいは笛を吹く時のように）、ふいご（鞆）の空気、風がパイプを通して発声する楽器であるから、非常に人間的な楽器であると言えることができる。この点で、電気・電子楽器とは全く質的に異なるものである。パイプオルガンの音は、風の音で持続するので祈りの心に通じると思う。その音色は礼拝に奇しき輝きを添え、全能者に向かって人々の心を高く掲げる楽器として、伝統的に尊重されてきている。パイプオルガンの起源は、紀元前3世紀頃まで遡ると言われるが、元は異教的な楽器であった。オルガンの楽器とその芸術が純化され、高度の発展を遂げるようになったのは、キリスト教会との結びつきの結果であったと言われる。オルガンが今日の楽器に近い姿をとるようになったのは、13世紀から15世紀にかけてのことであり、その完成期は16世紀から18世紀の間であった。17世紀から18世紀中葉までのバロック時代は、オルガン音楽の全盛時代で、特に先進国オランダの影響を受けた北ドイツにおいて盛んであった。オランダにスヴェーリンク、イタリアにフレスコバルディ、スペインにカベソン、フランスにはクーブラン、ドイツはブクステフーデ、バッハベルなどの作曲家を輩出し、オルガン音楽はバッハにおいてその頂点に達したのである。

ヨーロッパ、殊にイギリスの古い歴史を持つ偉大な大学は、聖職者あるいは教会によって設立された。そこでは神学の研究は特に重要で、主体の学問として扱われ、はじめは大学におけるあらゆる研究は、宇宙の創造主である神の本質のより深い探究を目的としていたと言われる。このような大学を構成する各コレッジ (college) には、学寮、ホール (食堂)、教室、図書館、と共に、必ずチャペル (礼拝堂) がある。チャペルには静寂があり、冥想と祈りがなされる。またクワイアの讃美と共にパイプオルガンが静かに、あるいは荘厳に鳴り響いている。

西南学院では創立当初からチャペルが守られ、讃美は盛んになされてきた。大学にパイプオルガンをとる願いは以前からあったが、1980年代になって、ようやくその機が熟してきたと言えることができる。その頃より約20年前の、1963 (昭和38) 年に、キャンパスに隣接している西南学院バプテスト教会に、米国ですでに50年程使用されていたパイプオルガン (カール・バーコフ・オルガン) が導入されていたのである。当時は学院の理事長、院長、学長をはじめ、かなりの学院の教職員が同教会の会員で

あり、毎週の礼拝におけるパイプオルガンの真価をよく理解されていたと思われる。諸条件が整い、1982（昭和57）年5月には、学院ではパイプオルガンの設置資金の積み立てが始められた。翌1983（昭和58）年4月5日には「西南学院パイプオルガン設置委員会」が発足し、調査・研究に着手した。委員会は学院の各学校の音楽担当者と事務局から1名の5名からなり、委員長には大学オルガニストの筆者が任命された。仙台、東京、関西、四国方面のキリスト教学校、また教会の主要なオルガンを見学、調査、試奏を行ったのち、委員会における慎重な検討の結果、最終的に辻オルガンを選択し、答申することになった。1985（昭和60）年3月には、学院はパイプオルガンを「西南学院創立70年記念事業」の一環として設置することを決定、同年4月10日には設置委員会の答申に基づき、西南学院はその制作を辻オルガンに依頼、契約を締結した。1986（昭和61）年5月には、西南学院大学同窓会よりオルガンのために貴重な多額の寄付を受けた。同年7月、8月にはチャペル内のオルガン設置場所の工事が行われた。



パイプオルガン取付け作業〈1987（昭和62）年〉

ランキン・チャペルは、はじめからパイプオルガンを設置するような設計ではなかったため、適切な場所の検討が必要であった。オルガン・ビルダーの辻宏氏と学内のオルガン設置委員長、大学施設課の三者で協議の結果は、会衆席から見て、前方右隅に高いバルコニーを新設し、その上にオルガンを設置することになった。これは、このオルガンには奏者の背後に第3鍵盤の笛を収納するケース、リュックポジティブが計画されていたので、オルガンを床に設置するのではなく、高いところに置く必要があった。いよいよ1987（昭和62）年7月13日にはオルガンが搬入され組み立て作業が開始された。10月になると、大学では後期に入り、チャペルも始まった。オルガン

は未完成であったが、制限された範囲で使用が可能であったのでチャペルで鳴りはじめた。11月4日、西南学院は辻オルガンより引渡しを受け、11月28日には待望のオルガン奉献の日を迎えた。午前中に西南学院パイプオルガン奉献式があり、ここでは大学オルガニストの筆者がオルガンを担当した。時間をおいて、午後には奉献記念演奏会が盛大に開催された。オルガン奏者は林佑子教授で、満場のチャペルにおいて、ブクステフーデの曲に始まり、バッハの数曲の名曲が素晴らしく見事に演奏されたのである。誠に感謝、感激のひと時であった。林氏は米国では音楽学校として最古の歴史を持つ、ボストンのニューイングランド・コンサーヴァトリーのオルガン科の主任教授であり、著名なオルガン奏者であった。このようにして出発した西南学院のパイプオルガンは、その後、毎週の大学のチャペル・アワーにおいて、大学、ならびに西南学院の諸式典等において讃美の楽器として鳴り続けて行くことになる。



アドヴェント・コンサート— 現役の学生とOB・OGの合同演奏
〈新チャペルにおいて：2009（平成21）年〉

◇辻オルガン選択の理由

17世紀から18世紀前半の時代には特に先進オランダの影響を受けた北ドイツにおいて、オルガンとオルガン音楽の全盛期、黄金時代であったことは先に述べた。18世紀のハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの古典派の時代を経て、19世紀のロマン派の時代になると交響楽的な影響を受けて、オルガンの楽器にも種々改良が加えられてきた。しかし、20世紀に入ると、そのようなロマンティックな音像のオルガンの傾向に疑問が表明されるようになった。かのアルベルト・シュヴァイツァーが「真のオ

ルガンに帰れ」と呼びかけるオルガン運動が起こり、バロックオルガンの優秀性が再認識されるようになったのである。このような理念を抱き、現在北ドイツで真正なオルガン研究の権威であり、その代表的存在と仰がれている人にハロルド・フォーゲル教授というオルガニストがいる。フォーゲル教授は2004（平成16）年10月には、西南学院大学において演奏の依頼を受け、見事なコンサートを披露された。フォーゲル氏は、古い歴史的なオルガンは、材料、構造、整音の姿勢、それに調律法など、今のものと異なっていて、そこに美しさの原因があると言う。あるいはオルガン造りの超一流と考えられている18世紀のオルガン製作者のアルプ・シュニットガーの作る笛（パイプ）は、荒削りな上に、その削り方が均等ではないそうである。しかし、それが一本一本の笛の表情を作っていると言われる。一方、現代の技術は画一的であり、前者が飽きの来ない魅力ある音で、自然食品のようなものとすれば、後者は、ちょっと聴いた時にはキラキラして良いのであるが、添加物で人工的な着色がなされているようなものである、と言う。辻オルガンの辻宏氏は上記のような理念を抱き、工場製のオルガン部品や、合板、プラスチック、合成樹脂接着剤などの使用を極力やめて、昔のように無垢の木と皮と、全体が共鳴するように、そして金属パイプも昔と同じ手法で作し、良いオルガンを造った昔の職人と同じ土俵に自分を置いて、古いオルガンの美しさのレベルに近づこうと模索しながら、理想のオルガンの音を追求していた方であった。パイプオルガン設置委員会は、西南学院のチャペルにおける讚美の楽器としては、辻オルガンが最も相応しいオルガン・ビルダーとの結論に達し、西南学院当局に答申したのであった。

パイプオルガンは、チャペルをはじめ学院、大学の諸式典、行事における奏楽と讚美として十分に用いられていった。時折、学内オルガニストによるオルガンリサイタルも開催された。また大学では、教授会で正式に「西南学院大学パイプオルガン・コンサート運営委員会」が設けられ、基本的に毎年2回、海外の、また国内の優れたオルガニストを招聘し、広く一般に公開された。多くの市民の方々にも大いに喜ばれ、大変好評で西南学院大学が地域社会に貢献できる大切な催しとなっていった。

これは、2013年11月7日(木)に西南学院日本館4階大会議室で行われた学院史講演会での講話をもとにして、紀要に掲載するために改めて執筆を依頼した原稿である。

西南学院パイプオルガン国外・国内のオルガン奏者による演奏会 1987年 — 2005年

1987年11月28日 (土) オルガン奉獻記念演奏会	林 佑子 (Yuko Hayashi: 日本)	ニュー・イングランド音楽院教授 オールド・ウエスト教会オルガン奏者
1988年10月21日 (金)	ドナルド・ヒュースタード (Donald Hustad: アメリカ)	サザン・バプテスト神学大学院 オルガン・教会音楽教授
1989年 5月13日 (土) 大学開学40周年記念 オルガンリサイタル	ピーター・ラヒューレイ (Peter le Huray: イギリス)	ケンブリッジ大学セント・ キャサリンズ・コレッジ学長 オルガニスト・音楽学者
1989年11月14日 (火)	マッシモ・ノセッティ (Massimo Nosetti: イタリア)	クーネオ国立音楽院教授 サンタ・リータ聖堂オルガニスト トリノ大聖堂合唱長
1990年11月29日 (木) オルガン設置3周年記念コンサート	ペーター・プラニアフスキー (Peter Planavsky: オーストリア)	聖シュテファン大聖堂オルガニスト ウィーン国立音楽院オルガン科教授
1991年 6月19日 (水)	ゴンザレス・ウリオール (González Uriol: スペイン)	サラゴッサ音楽院教授
1993年11月18日 (木)	植田 義子 (Yoshiko Ueda: 日本)	国際基督教大学オルガニスト 東京音楽大学講師
1994年 6月23日 (木)	ヴァルター・グライスナー (Walter Gleissner: ドイツ)	ディオニシウス教会カントール アシャフンプルク・バシリカ大聖堂 オルガニスト・聖歌隊指揮者
1994年 9月27日 (火)	ペーター・プラニアフスキー (Peter Planavsky: オーストリア)	聖シュテファン大聖堂オルガニスト ウィーン国立音楽院オルガン科教授
1995年 4月21日 (金)	ゴンザレス・ウリオール (González Uriol: スペイン)	サラゴッサ高等音楽院教授
1995年10月20日 (金)	ステファノ・インノチェンティ (Stefano Innocenti: イタリア)	バルマ音楽院教授 聖リポリオ教会オルガニスト
1996年 5月24日 (金)	ボイド・ジョーンズ (Boyd Jones: アメリカ)	サザン・バプテスト神学大学院教授・ オルガニスト
1996年10月11日 (金) 西南学院創立80周年記念 オルガンコンサート	ギィ・ボヴェ (Guy Bovet: スイス)	バーゼル音楽大学オルガン科教授 サラマンカ大学オルガン講座講師
1997年 4月21日 (月)	マッシモ・ノセッティ (Massimo Nosetti: イタリア)	クーネオ国立音楽院教授 サンタ・リータ聖堂オルガニスト トリノ大聖堂合唱長
1997年10月 2日 (木)	鈴木 雅明 (Masaaki Suzuki: 日本)	東京芸術大学助教授 バッハ・コレギウム・ジャパン主宰者
1997年11月 6日 (木) 西南学院大学パイプオルガン設置 10周年記念コンサート	林 佑子 (Yuko Hayashi: 日本)	元国際基督教大学客員教授・オルガニスト ニュー・イングランド・コンサーヴァトリー・ オルガン科主任教授
1998年 5月22日 (金)	ジョイス・ジョーンズ (Joyce Jones: アメリカ)	ベイラー大学特任教授・オルガニスト
1998年10月 2日 (金)	ルドルフ・シャイデガー (Rudolf Scheidegger: スイス)	チューリッヒ音楽大学教授 チューリッヒ・グロスミュンスター 大聖堂オルガニスト

1999年5月7日(金)	ヤン・エルンスト (Jan Ernst: ドイツ)	ハンブルク音楽大学教授 シュヴェリン大聖堂カントール・ オルガニスト (※カウンターテナーと共演予定であったが、歌手の健康上の理由でオルガンのみとなる)
1999年10月8日(金) 大学開学50周年記念コンサート	ギイ・ボヴェ (Guy Bovet: スイス)	バーゼル音楽大学オルガン科教授 サラマンカ大学オルガン講座講師
2000年5月8日(月) バッハ没後250年記念コンサート	ヤン・エルンスト (Jan Ernst: ドイツ)	ハンブルク音楽大学教授 シュヴェリン大聖堂カントール・ オルガニスト
	マインデルト・ツヴァルト (Meindert Zwart: ドイツ)	カウンターテナー歌手、学校音楽教師 (※オルガンとカウンターテナーとの共演)
2000年12月1日(金)	ゴンザレス・ウリオール (González Uriol: スペイン)	サラゴッサ高等音楽院教授
2001年5月11日(金)	ジョナサン・ジョーンズ (Jonathan Jones: イギリス)	ケンブリッジ・バロック・カメラータ 主宰者 ケンブリッジ大学・モードリン・ コレッジ・オルガニスト
2001年10月29日(月)	スコット・ショウ (Scott Shaw: アメリカ)	活水女子大学音楽学部教授・ オルガニスト
2002年5月10日(金)	井上 圭子 (Keiko Inoue: 日本)	神戸女学院大学講師 すみだトリフォニーホール・ オルガンアドバイザー
2002年10月29日(火)	エリザベス・ハリソン (Elizbeth Harrison: アメリカ)	ウエストミンスター大学助教授・ オルガニスト
2003年5月16日(金)	廣野 嗣雄 (Tsuguo Hirono: 日本)	東京芸術大学音楽学部オルガン科教授 日本基督教団本所緑星教会オルガニスト
2003年10月31日(金)	クレイグ・ハンセン (Craig Hansen: アメリカ)	クレイグハンセン音楽院主宰者
2004年5月28日(金)	松居 直美 (Naomi Matsui: 日本)	所沢市民文化センター・ミュージック・ アドヴァイザー 川崎シンフォニーホール・ ミュージック・アドヴァイザー 日本キリスト教団小金井教会オルガニスト
2004年9月24日(金)	ハラルド・フォーゲル (Harald Vogel: ドイツ)	北ドイツ・オルガン・アカデミー主宰者 ブレーメン芸術大学教授
【2005年3月20日 福岡西方沖地震発生、オルガンも損傷を受け、修復したが、西南学院理事会は耐震構造のチャペル新設を決定。次回がランキン・チャペルにおける最終コンサートとなる。】		
2005年10月31日(月)	今井 奈緒子 (Naoko Imai: 日本)	東北学院大学教授 東京芸術大学講師、 霊南坂教会オルガニスト バッハ・コレギウム・ジャパン・ オルガニスト